

二澤観音堂の絵馬が 三井記念美術館に出展されました

この度、二澤観音堂（有田川町二澤）に奉納されている絵馬が、東京の三井記念美術館で開催されている特別展「地獄ワンダーランド」に出展されました（9月3日まで）。この展示会では、地獄と極楽をテーマとする各時代のさまざまな作品を通して、日本人の死生観・来生観をたどり、地獄絵の魅力を感じることができます。

二澤観音堂から出展されたのは、地獄図と心字絵解図の絵馬です。これらは、幕末から明治時代にかけて有田川町二川で活躍した画僧の林文吾（はやしぶんご）が描いたもので、「熊野観心十界曼荼羅（くまのくわんしんじゅうかいまんたら）」の影響を受けたものであると考えられています。熊野観心十界曼荼羅とは、江戸時代を中心に熊野比丘尼（びくに）と呼ばれる尼僧が諸国を巡りながら絵解きをした際に用いたものです。「心」の字を中心に人間の生老病死と地獄・極楽を一つの画面に描き、地獄に行くか極楽に行くかは、その人の心次第であることが説かれ、庶民の間に広く信仰されました。

二澤観音堂の地獄図は、雲によって画面が分割され、閻魔大王（えんま）の裁きの場面や生前の罪業に応じた地獄の責め苦を

中心に描かれています。右下には、亡者に食べ物を施す施餓鬼（せがき）供養が描かれており、亡者を供養することで地獄に落ちた人も救われることを説いています。

心字絵解図は、明治14年（1881）林文吾73歳の作です。「心」字に自在鉤（じざいかぎ）がぶら下がる様子を描いた額が掛かり、指南役の人物が左手の指し棒で額の「心」字を指し、右手は下の形の崩れた「心」字を指し示しています。また「よきによ あしきになるな をしなへて 人の心は 自在かぎなり」という歌が添えられ、人の心は自在鉤のように自由に調整できるものであり、良い手本に似るように、悪い手本に似ないように、勤勉に生きることの大切さを説いています。

この特別展は、9月23日（土）から11月12日（日）まで、京都龍谷ミュージアムでも開催予定です。



地獄図絵馬 縦 150.4cm 横 187.1cm



心字絵解図絵馬 縦 59.9cm 横 98.3cm